

盲ろう教育における教員の専門性向上のための研究

1 盲ろうとは

「盲ろう」とは、視覚障害と聴覚障害を併せ有する状態を指し、重度の情報およびコミュニケーション障害をもたらします。世界でもっとも有名な盲ろう者は、ヘレン・ケラーでしょう。盲ろうの子どもたちの中には、彼女のように、視覚と聴覚のみに障害をうけている子どもたちだけでなく、その他の障害を同時に併せ有している子どもたちもいます。なお、全盲と全ろうの組み合わせだけではなく、弱視や難聴が組み合わされている場合も、独自の困難が生じることがあるため、「盲ろう」と称しています。

2 盲ろう研究の全体像

盲ろう教育に関する課題は多様で、本研究所では、「盲ろう」にかかわる教育相談から展開した研究や知見を土台にして、次のような取り組みと研究を進めてきました。

- 1) 多様な盲ろうのサブグループについての教育方法、
- 2) 国内外の盲ろうにかかる資料のデータベース、
- 3) 実態調査、
- 4) 家族支援、
- 5) 盲ろう生徒の高等教育と就労支援、
- 6) 盲ろう教育担当教員の支援。

本研究においては、その中から、教員の専門性向上について焦点をあてました。

3 盲ろう教育の専門性向上研究の必要性

視覚情報と聴覚情報は、その量の多さ、速さ、精密さ、空間の広がり等々において、触覚・嗅覚・味覚から得る情報に比べて圧倒的に有利です。視覚と聴覚の両方に障害を受けると、重篤な情報障害、コミュニケーション障害、そして定位と移動の障害が生じます。親子の愛着行動を含むあらゆる人間関係の形成、コミュニケーション、日常生活、概念形成等に「盲ろう」独自の配慮を必要とします。これらの困難とニーズを理解して初めて、盲ろう児童生徒が潜在的に有する力を伸ばすことができます。

日本ではこれまで盲ろう児童生徒を担当する教員のための研修プログラムが提供されてきませんでした。

盲ろうが独立した障害カテゴリーとして日本では扱われていないこと、発生頻度が著しく低いために、県レベルでの専門性の蓄積が困難だったことが主要な原因です。平成19年度特別支援教育資料によると、特別支援学校にいる盲ろうの子どもたちの数は全国で572名です。

なお、アメリカや北欧では、国の支援のもとで盲ろう教員養成・研修が過去30年以上行われています。そのきっかけは、1960年代におきた風疹の大流行です。非常に多くの先天性風疹症候群による盲ろう児が一時期に集中して生まれ、盲ろう教育にかかわる教員の養成と研修が急速に進みました。そしてその後は盲ろう教育の独自性を鑑み、盲ろう教育の専門性向上が進められてきました。一方、日本は幸運にも風疹の大流行を免れたため、多くの盲ろう児が一時期に出現することはありませんでした。結果として、日本では盲ろうという障害の存在が十分に認識されずに来ました。

「21世紀の特殊教育の在り方について（最終報告）」第3章1-1では、盲ろう教育担当教員の専門性向上の必要性に触れ、「国立特殊教育総合研究所や国立久里浜養護学校等におけるこれまでの研究の成果を踏まえ、国や教育委員会等においては、教員の専門性の向上や成果の普及、教育相談の充実を図る必要がある」と指摘しています。

このような背景をもとに、本研究では盲ろう児童生徒を担当する教員に向けた、基礎的な専門性向上をめざした具体的な研修プログラムを提案するための研究を行いました。

4 研究の内容と方法

以下の構成からなる盲ろう教育の「速効性」があり「普及しやすい」研修プログラムを研究開発しました。

事前学習（研究所来所の3～4週間前に事前に行う）

- ・担当盲ろう児についての基礎的資料整理（見え、きこえ、コミュニケーション、環境理解、主要課題）
- ・盲ろう児童生徒との実践をビデオで撮影し30分に編集（講師等と視聴して話し合うため）

研究所における参加型研修（2日間）

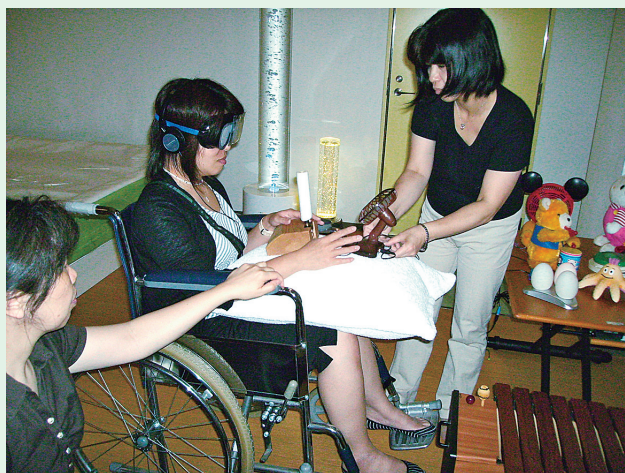
- ・子どもの状態に応じた疑似体験、受講者の疑問に応える実践的講義と助言、参加者同士の学び合い
- ・ビデオを視聴しての協議と助言 ・これらを総合して学校にもどって取り組むべき課題と方法の整理

事後実践 受講者は研修結果にもとづいて学校で実践をおこない、1ヶ月後にその実践報告を提出

一学期後の実地フォローアップ（講師が直接学校を訪問）

- ・講師による終日の授業観察と助言、これからの実践の方向性についての話し合い
- ・学部あるいは全校に向けての研修内容の校内普及 ・県の指導主事と連携しての県内への普及支援

上記研修内容・方法によるモデル講習会を平成19年と20年に1回、各2名の受講者で実施しました。受講者からは、事前学習、短期間の来所研修、フォローアップの全てにおいて高い評価が得られました。また、T県の教育総合センターの指導主事と連携し、県レベルでの専門性向上と継承につながる研修のフォローアップを行い、県との連携の在り方や必要な条件等を整理しました。これらの研究の結果を踏まえ、日本において実現可能な基礎的な盲ろう教育担当教員研修プログラムを提案しました。



運動障害のある盲ろう児童に似せた疑似体験の様子

担当児童の視覚と聴覚の障害にできるだけ近づけ、車椅子に乗って、日々子どもが会う状況を疑似体験します。さらに、視覚と聴覚を担当児童の状態に似せて調整する過程で、担当児童の視力やオージオグラム等の解説を受け、それらの意味と配慮を子どもに即して学ぶ重要な機会ともなっています。

5 本研究において提案する盲ろう教育研修プログラムの特徴

本研究で開発した盲ろう教育を担当する教員のための基礎的な研修プログラムは次のような特徴があります：

- 1) 日本で初めての盲ろう教育の研修プログラムであること。
- 2) 教員異動が早く、また、ほとんどの教員が2年程度で担当する児童生徒が変わる日本の教育システムに適合した、研修効果はやく現れる速効性と、他の教員への普及がしやすい、研修内容と方法であること。
- 3) 事前学習、短期間の来所研修、フォローアップにより、受講者が学校を離れる日数を最小限に抑えられていること。
- 4) 講師の訪問フォローアップによる研修効果の確認と受講者への実地支援、校内普及の支援が組み込まれており、効果の定着と普及が期待できること。
- 5) ナショナルセンターである本研究所と県が連携する専門性向上のための研修システムであること。

本リーフレットは、研究所で行った次の研究を基に作成しています。

【研究課題名（研究期間）】

専門研究B「盲ろう教育における教員の専門性向上のための研究」（平成19年度～平成20年度）

【研究代表者】

中澤恵江 (nakazawa@nise.go.jp)